

東如被活

911.3
卜
乾

青牛舎
翠古

東西夜話 乾



元禄のころ一幸己乃夜をゆるぎと語のひいふ
國く乃人のぬく東屯坊の越路乃そ遠哉
今日たらんともまありまぬあを肥存典は
の人ありあまこ河尾張村人ありとれ流く
侍勢の人くもあま府の行りて神ありまの
國の人かろく彼をさゆりて家と木を
家を彼りあしけたりをさる世乃とあかく
おろりもおろり新なるん幅しけりあ

人乃先のそけ子はおさるるを志すまを
随侍久しうれも能造もよくしんと思ふ
し人みづれく人ともも能造のそけを志す
野狐心乃は経あり無義相乃おのこあ
はれは懐海して越戯とそしるあはれは懐海
く画微すしうあけさういあすしは凡
乃真加をすすいそそ才智をりし志す
む世子う門業の對するは是の事く是
以ひ非をすく非をすは是非を指し人
をしらむやまあそけ身死んす志す

越路の人一むよくを非もあすは
心とありれと強くと也そ人乃能造をか
くはふりし家あしんを師のあはれ
りまをいしんく植りし師のあはれ
さうこれをはりたむ生まれ

彦根

を老井の例の人くよりて松山依屋圖の
隣りあはれは師のりささのあり終り
さゆ体がまねりりささ一軸子刺し

敬啟者
先夫之遺囑
所遺之產
均歸我子

承

朝妻

承蒙
先夫之遺囑
所遺之產
均歸我子

承

承蒙
先夫之遺囑
所遺之產
均歸我子

敬啟者
先夫之遺囑
所遺之產
均歸我子

承蒙
先夫之遺囑
所遺之產
均歸我子

承

敬啟者
先夫之遺囑
所遺之產
均歸我子

承

承蒙
先夫之遺囑
所遺之產
均歸我子

よーじー長乃ちまーけあー習指ー
終るよ志ー海言のそひーしお祝つえり
とよ中四祀よ修終まーしすおくーと務
吾翁乃菊と手おしまとふらる高
痛乃ゆていふ一ゆーもらうてを法のよら
よおとらゆーむ

海言もまじあやめぬらる湯のそ

夜話

け枕よ十景あり先少むーとる康の徳たと

いふ歌をさりて

かゝる大よかーる波の下むまひ

今宵枕始まうよけを福ーて回かー大よ程
ろくと魚とあまーいりなりーむまよーと
まよせくーいり小流を河麻の外又あるまー
一勾乃書中ーあをるるといふまけあー物
了然も繻もおれーんをりや出のよ人
よとそもに似借をいふさー

汐掛松

閑雲のぬけ日乃ある一まじきせしついで
川船は一棹の風を添えたる夕の月と一里
さうもなまじし江上の清風も山石の影も
ともになほしきあそびの夕の月と一里
松葉ちる風や磯を渡る波の毛

里揚亭

縁人アノきい人見きよクまきみ

何由亭

市中乃日和さこめむまみ

なまじし全昌寺といふ古き先師一夜の好む
まいてをなまじし出さる寺アチる柳や
いつもま柳一乃あともゆりうまをれがく
けみてうままいゆり

まき柳一乃あ葉や秋もまわわ

堀氏のなまじしをいさして八十年あまわ
七やせ乃や津まこやうにう頭のををれ
まきまのいさし柳の嶽乃よらぬひさし
まき山もけあまわちるまきま

盃も人もあやうくと酒場の一真を借
きりるなり

新菜もぬきし老乃ほら

宿話

今宵宿屋の痛あり先師柳周り荷ハ涼一
神喜丸といふハ神喜丸乃大切な終ハ行巻と
いふ終ハ終一白一〜原ナキ一實相院
ナシ〜山伏乃且般もとを終さ梅ナリと
〜〜至一〜次ノ夜ある人の子ハ凡雅乃

宿屋といふハ以には終日ハ終一〜宿屋
ナリ〜宿屋ハを終〜〜ん乃宿屋ナリ
〜〜ハ宿屋ある〜のハ柳周の夕を宿屋
〜〜ナリ〜宿屋ナリ〜の〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

為前

川中て傍とえう終む友乃月

名流

燕も積りらるるに乃日新 厚お
 稲妻や 霜うららけを膝の上
 呼ぶ事なきは 孫も孫なきは 小豆公
 子智子 机まじりや 梅のむし 関雪
 鼻絆乃 宵中へ まりねおさりけ
 家よぬれや 啼おろそ 咄うね 長水
 妻ハアガリよの 面ハ喜ハ 凡の色
 世中ハセウ 一月乃 傘の下 虎角
 追剥も まるう 旅野う 鶴うね

本凡の喜よる ありわほり 方錐
 飛さるこ 妙上よ 志秋く ち文を
 水喜を 使了し ありや 友の月 里楊
 白登乃 木のつらよ 見ゆる 庭を 葉
 咲きらよ 井戸の 木むや 白牡丹 何由
 苗代を 股さる ぼほり かくま 友夕

手元川

け川ハ小玉オ一の 難水なるを 見後
 一里さうも ありん 川上ハ 峯そ びきり ちや

所そのるよはるなり川下ハ海ありては
りともちうり今ハ水枯乃その付たの
隙もよこりくぬ移ハたありよち
大井川乃川越の富士ありて
此ちうりまはるよ月白のそちうり
まはるのやうはるなりこ
又うりてそまはるなり
屋のやその名も志す
大井川

金沢

鳥水亭

友を招け川かき茶葉と月
け地は兼酒乃名ありて
よ才川乃がよち移りて
中なる

面青亭

笠をたしよぬそ
魚喜亭

面鏡中くよ木葉あり月園

小まきり

けきうハむう一吾等の一夜二夜乃きし一寐
中ニ終一う早寝のきり一句よき何の面影を
跡一山中の葉乃きもけあうわ吹はいて
若乃あう一けけあうなまらわをなむき
ままおまおたう一まこなまらわ一村井ま
まけけよ水鏡のぬいし涼一抽殺奇た跡葉
まあまはゆまうあうん
まの井乃きまを味ま下駄のき

金三

巴東亭

村の乃きトヤあう一死なう

・任之亭

おれをうよ海よぬまねむあまきけ

なまけやあまのまうまかまはま

万子亭

けきうハ先師竹乃益賛あり跡う一忌目お
けきまよけ終つて一けあう一はるまうま
まみもゆりまう又けおあまの位て
人乃の竹乃まら終竹の月

八景號

繁く老れとて秋そよのむ

閑を喜ぶ

世乃ゆりこえさよ神家子

從吾喜ぶ

夕晴乃こりや黄色子凡のむ

相之喜ぶ

あ夥ともんやまーや背戸のむ

けきの存ま津野川の川きよはあそし本
る乃月も志うしく市朝をいささし

似たりは夕何となま琴のきりやまきり
まりこのきりゆりやあむ余不乃朝陽の
志のまやあそんを奥しぬんを相乃
ゆりまきりいまあむを秋

琴乃きよのそけい百念の月夜

秋を傷む

ちうふにたりて勝より願ふ

示秋を

あう秋を傷やみ余乃秋の世のぬり又ま
秋を傷なるるん秋をいささけま

又ひらり好悪を人の心もあやて彼を一切
 たるもの世むし湖南の幻信庵より一夜の
 夢をむきししその夜もしし深きし
 やまらんやうしやまらん世帯迅速乃一勾
 をあえて先師も桂葉中しおろわす中結し
 今け茶庵よおれしんもまは合し信法師の
 お信くはるうあいにぬ日乃強りもはりくかく
 何なるこそあやしくたよとくれ家又あや
 事ゆへあそんたたりし結たまひといふ可ふ
 みよやあしんと世ころんくもししひまら世

秋之坊曰信法師はさるなりなると曰さむは
 原るんよさうかんとま世信法師の
 是より何らひあしんままた世の凡信は
 し世にまらさるるなりしんし信法師は
 おあやのさるるのなれまらるるはあま
 へし信法師はまらししを志あてしん
 ときたあを坊うしを世信のうさあま
 了む信法師のしし信法師はあまらしや
 凡信法師は

信法師の
 塵劫記

或日應吉の院もをきり結てたふりの家持能
 又ふりきるうけおをけよはのうらふよん乃あり
 舞ふふりあうくくの家をゆいふよありあ
 りたりーり衝門きうくくの結て金屏乃ひり
 里遠き人をしていのかくあこりまははゆり
 するい森のわさよああうて志う原摠下乃
 夏ひさーり多指伸乃きおーいほいさるもや
 鼓の音をたうくくや櫃の箱まのふ備おあら
 きいくとおのあよほよかの遍昭のうら乃り
 ふい路もておお姿のうらむりーさるのうらふ
 そありまら

よあをいよ後陳乃の袖けろひてかよくとい
 うけさるおおけ日乃能きまのねをま
 そありまら

ね衣やその夏さたて松の鞍

歌謡子

雪子や湯一對り羨乃を

歌謡

作茶は似るあひやいうん換

留別

春うねをよとて盃乃のあ結れ

名法

所根不乃ありを講よ物さきて

流りかしくものあらしくなり

今言傳して曰世上の能徳は八毫を財かめたり
ありせしはむきなりとおもつりたる廉誅なる
あつたあるまじく講よ不ふする財さそことよむ
人これうけりておほくは流りかしくものあらしく
神はあふたふあつたわかつる微細のふと志す
附言するものありや也と見えたりゆへに
とくきするをいふゆへに一生能徳乃微味す

つら作事な坊ある時

いと川かゝ作のあはし麻なり

弦をえし出せ終るぬり障さうれ

かく附きし人々俯仰長短起所のさうゆえ
あふ乃意をさむく世なり

附方論

世の人能徳は歩註をくくじに附方あり変化せ
あつたる在也むくし乃さふんはさるるなり
あらん今能徳は歩註をくくじに附方あり変化せ
附方歩ゆもわかれて一白くの変化化たのち

お越乃くまきとふ人の附くるあはれ入附む
とつ一人なりをお越乃あはれさかして一句よせ
句も十句もあはれとふの附む一句のよき
かきくまきとつ終の句もおめい手あはれき
とふところはあはれ附むをとりて

○今日もほ世の暇待をくゆり

其人

はくくとお松のわがまうわえ

其情

湯ありわがみさ藤よちりよまのむ

おね

飛多乃親もかきう子まじちまはれ

時草

お松の言も静子年と終り

時直

五月雨乃お農あはれもおねおね

おね親おねおねとつ附方もあはれといふ句

親おねおねおねとつ一巻乃変化とつ

句子おねをけられといふありその附方

まは一句の曲なり

軍書面叙

楠うまめれまきり子孫一もて

お終の面叙

入居も娘子存せと云をい

悪の面叙

帯と女子ううみ儘うあ

むうの附とらうもあ

名ホハ一巻の他一二白ま

美い虎乃食らるるこそめりゆ

名録

かひまきみきりてはくやまら乃る

鴨乃まきのかまや子稲本

猪飼火子燃てけくく白髪

名を赤をちくくけてや

美くう結まきほく糍

秋凡や稲よむお

傘お乃そのり手も

クうほ子のまき窓あり

顔あらし水の清さ

まゝとあり水原涼——花月をぬ 牧童

飯屋釣子と火をかくし玉まき

乞食とたぐひ六葉舎子と湯小

不仁村下原まきとらの島うね 魚素

梅もあまをたぐひたり飯屋の月

とくさんな餅 たりとるに下まき

雪のまきや小菜堂乃出れ月 鳥水

木下下の園とさうさむしりて原

雪も啼 くれまき乃み梅くれ 小春

雪もまきとる森の連や蓮の急

花もや葉も桂と——寝れもす—— 相之

松乃葉のうほひとて終山彦れ

山川や木葉はぬれも伝まきり

花もまきとるはまッ花勢田の梅 従若

障つとまおとく時面とるは梅水

釣舟乃けりうつゆるうたしのを 巳木

押合て簡子なりまきりみ飯屋

寐へもまきとるは園くれ

雪も骨おとる雪月のゆきりぬ 秋坊

菜乃味のほく空をまけと手取夜小

菓の香をかきや唐乃おの味 八景

白鷗子りよまの空をさすお水

雪取と紅のちやさ津東見の下 長緒

聖君乃たりこたりきり神坊之

鶏の距はくはや桃のむ 巴堂

夕川や流しとあまよ 汗拭

振の多形糸のうつりや籬の袖 南里

葛葉月屋ぬく朝をあらもきり

白干や報よきくを書おれ此山

木刀を簾乃ほおくりや面形萩

ぬることお神もあまききり 四睡

稲妻乃りり才をきり言寄 野棠

顔んききしつ川まき啼ぬく 筑

足つ終て火篋を川ぬる火燧 文砌

又見しこまもむくこるおらわが

何よ中から終てさこ西川あき 三通

さやぬる形松よ一つむあ川さす

白く猶跡あ川くお十夜お 藩月

赤陽下草種おはれておら終候

毛の心は下を以て一西條川
 如十と心は下を以て一西條川
 氣は下を以て一西條川
 妻共下を以て一西條川
 火の何乃を以て一西條川
 梅の葉は下を以て一西條川
 飯計甲を以て一西條川
 竹葉は下を以て一西條川
 衣は下を以て一西條川
 葉の心は下を以て一西條川

和交

夏付

一回

藕糸

志堂

袖は下を以て一西條川
 下女は下を以て一西條川
 衣は下を以て一西條川
 葉は下を以て一西條川
 白糸は下を以て一西條川
 山衣は下を以て一西條川
 葉は下を以て一西條川
 衣は下を以て一西條川
 出川は下を以て一西條川

林陰

夏

袷

元

頼

石

和

輕舟

ほろくし夕をばりー意程

と新をさく人をたしと中才 玉枝

秘事火は抹香の香や玉丸も 和友

海次ト野体くくも生一付鳥 新故

一凡は事たる信をこ乃木の葉 八十

やまはけてぬも歸一也解の夢 字路

石動

宿親善也

蝶乃羽も善く秋乃乃月細一

は地の連流教多な秋をけ今

一庭よりやまむ二庭よりやまむ

とつよをこえて

凡出くそえそや一庭所あま教

全山信も秘苑の裏りとい

あり花とけとわ是が言りわ

しり笹はさみの凡乃涼くわさ成

一人は涼む室あり誰りあ

温故亭

老星堂乃なるふし仕友のいよむたをさる

以雅の所 とも又志神アさるうけ日神さ
きもきくまあつてまう神家の末立お源
水俣乃あこりまもあま乃相の之祭又祭
まきく日神さくまの風か山をよわ
そ徳も嬉しあかこ乃さく山をあわさる
相乃祭のんちちくく新の秋
恐く人さ

けあるく一瘡あまく秋中も風旋り持
さゆまひく徳くまを傷くけ脚をまひさ
さ徳くまをんさくま感く

ねちくま瘡となつて一茶うも
親を寺奥り

六月まひやと見えく一書 齋

あまの日記句まひさことうまき
日ひさことうまおまそあつてまゆへ
とりの所ハまきくまをいしと流くま
いさういハ和流也

諸植生八幅

けし年一ろまそのま本方あ乃乾状とこめ
てまん明く名林さくけく地也彼またま房
ふまままを坊むくま一紙乃乾状く

下之今更一篇乃風雅下者其心終
先之其心終其心終其心終其心終
美風其心終其心終其心終

東納

白鳩乃其末五原一林の書

裸子乃其權乃其心終

益の賛

意心之付裸子其心終其心終
從古言其心終其心終其心終

竹下其心終其心終其心終

其心終其心終其心終其心終

其心終其心終其心終

裸子其心終其心終其心終

向者子園

德德其心終其心終其心終其心終

意乃其心終其心終其心終其心終

其心終其心終其心終其心終其心終

其心終其心終其心終其心終其心終

其心終其心終其心終其心終其心終

るにあはるいふさむかひの親よあはるいふ子よのむ
又毒のむあはるいふさむかひの親よあはるいふ子よのむ
きりわとるいふさむかひの親よあはるいふ子よのむ
乃よりてあはるいふさむかひの親よあはるいふ子よのむ
あはるいふさむかひの親よあはるいふ子よのむ
ともたのむいふさむかひの親よあはるいふ子よのむ
こゝろくむいふさむかひの親よあはるいふ子よのむ
て附句さ一字一言もあはるいふさむかひの親よあはるいふ子よのむ
いふさむかひの親よあはるいふ子よのむ
あはるいふさむかひの親よあはるいふ子よのむ
あはるいふさむかひの親よあはるいふ子よのむ

系統くならしめあはるいふさむかひの親よあはるいふ子よのむ

名録

程和乃あはるいふさむかひの親よあはるいふ子よのむ 濫吹

舟乃帆を中へ通ししき田代

六月の来はるいふさむかひの親よあはるいふ子よのむ

宿まらるいふさむかひの親よあはるいふ子よのむ

水喜世のあはるいふさむかひの親よあはるいふ子よのむ

致屋はるいふさむかひの親よあはるいふ子よのむ

まきるや 徳よかりた手習子 温故

玉棚や 神をひらいて英くらむ

古山古塔

るはよあはれ物二を家乃子殺そは

梅の花ををさすよ夜子孫おし

草子おれをきてまらぬや田のそ

公家をさす川こたむ也一夜箱

凡がし乃物と流るるはさるるも

空は又羽尾をしおわて枯那がれ

同う川もや化春のつやも扇折

凡の春よやうやうはれや雪子

おれを摘むことなるとし

古白

平動

若山

岩雅

静さやを種くま法能はさる

往く宿そ本毎候もた乃手おろ子

啼 鯉とうつくとし乃之を種は

者乃を喉て林麻のきしわらふ

ひらふをわねてをやひるせんは止

川ゆゆはしつとよらぬや小角豆垣

夕うはゆもさうられしにてあまの凡

苗代や札よあうぬら解えつら

扇さよお奏をのそく早心さけ

あやう種を祖父うきおておし酒

従古

香鶴

方堅

咫尺

為也

て可伝守のま袖と原はよむ福満乃方了
おもむくそのた一里はももあさく

途中吟

あつと日よやうの心ふくし中梅子

け日もあつと善かつて井波

山乃月うけいと涼しき袖は

さゆりといは乃をたりの望の月夜

巴字乃乃あつと乃も出むし兼

つちきりちまゝあるし袖は今

着はけまうよ入つてしりし月夜

もち葉内中さ袖しを

紫さ乃乃あつと乃も出むし兼

け巴字のわいハ生つておまゝお横もすし袖

きりりとい人のこゝろおのこなりしん乃む

乃いそは雅まあそあつとはうし袖よその

人喜いとやさしき世のあつと袖も忘れさる也

肩も人勝つ人ともにお横る

柳士亭

け何ぞし神志丸をまをまをくし身は袴し

衣襟はききして家あひさう一申す物しう今宵
之は物しうききし麻乃物しうさあひさう衣襟は
よる山むやうにそおほくはる

凡そ凡そ実をいふはうそをのめ

小校文通

けし物むしう一先物しう山むやうて凡物しうはまこ
とありと志物しうも田祿のむに凡物しうの根性
とさうおけむの根凡そ凡物しう言物しうを志物しう
しう山物しうの物しう物しうおけいさむとらう物しう

志物しうも根性おはまこさういへてさうむしうさうも
言物しうの物しうあひて志物しうさう一さういへてさう
乃さういへてさういへて志物しう乃あさまをさうし
さうもとらうむしうさう凡物しう乃才一なりとい
なす物を物しう一さう化さう物しうむしうの實
さう今物しうの虚となり今物しうの虚一さうさうむしう
さう文か乃實さうかさうさうむしうさういへてさう
さう納りし山物しうさう山物しうも田祿時と
観物しうをさういへてさういへてさう虚實自在のさう

小校文通

さう物しう

夜話

枕をうり床後そとうらむれ

才仕家子二條書よ伽羅をのめ

今宵思白の蒲ありきとて六枕を川の白を
とて人妻籠なりとてささひらよ人乃本妻
よもあるとて原又書とてむも何とあきき
まひや傾城乃口説とて思ふよしと神ともけ
をけくらん世情乃通不通あり能造よかと
身むらきらんよ傾城乃口説とて思ふよし
よ才仕舞といふ神六枕乃よ川よとてささ
原

原をささるハ才仕家乃あとの相淋しく
秀たし引くをるよ神とて枕なるもか歌
細乃凡情を歌也在るも能造よはたほ
りたりとて世情を志る人よとてささ
原

当別

あをよはけふ床出と井波乃方よおまじ
つよ中夜後のぬしとて神よとてささ
さらあるとてやとてんよ祈りありささ
かの
松浦さよひぬう袂なりとてささ
乃とて歌よ
しとてあらしとて川よ神なり人のん

より船を法舟の情なるを
り神を神なる友聖のかさるる

名禄

駒を新肉あつて女や鉦の響
白飯新くき蓮よてら目く竹
ゆりうけて吹かると志らし着乃裏
虚に世傳よとあつては吹志す
巴兮
ぬまや及くくくくく牛一の舌
木かりしや生海流をさし深重乃脚

縁の白葉や秋子て落す掬の先 柳七

誇今も勝とすくくや 流 園

秋の聖や地蔵ハ地蔵ハ秋ハ春

くくくくくく古く 五月 是遍

そ枯乃こびや定家乃假名の紙

よし女形これちうつふや木孫養 一康

新くや衣紋はくくく家あり

玉章跡神くく娘 一窓の月 逸正

吹くくく粟乃小多や一三は

よし女や足洗ひけり 舟 竹案

胡仲亭

反業跡 寐えん 股のり 介もが

浄蓮舎

蓮のむらりーるれと急介也

廿五日

東屯坊も七十年跡 母あもて去年の夜これ
月の来よ身あられとかなむとを二回も
くわはは延まふより雲よまうけ 雅會を名
け彦よのそみて此月けふかゝる 桂麻乃値

遇乃縁を感ししな 津餘表乃今又なる
をおかりくまうらぬ

三皇は乃袖もあひひとならこい 浪化

け月此日をわきわ阿母う忌日はあゝわて好ま
きおこををれ一仏一向の本教むな一いつ
けこてくまは理乃老をこいせくまのの生祀も
作を被一喜の字乃哉 さあや侍らん
反跡名の若荷 そくまよまよらう 志考

十治亭

け北を蛇あふりよかて繁葉の名跡坊下
一の幸に人の家たもはあへく一くよら川
たのりよきかこよ位たのりまらけ

秋也く又ま古ありまの机

不審亭

け亭よほとさ入亭るまの
たけ階榊二階
えうりよの海りて秋天す川さやうなるよちりし
以乃をもおとらるえりも吾起所の幸跡三枝重を

侍とくお解をくようこを乃也

山之形ぬある一まうけきく神てたたり一若
徳寺よ初原を梁榊乃若雲もたつ子よあつて
ふよはは砂の子細もやまきよおとあひふたら
と見るとこたあま育王山僧は山も陸もそわ
まかこつ山田川を層こて金戸の里ちうく
民家乃炊煙も田はく形まのるよつうたる
薄よまをけ一まよおけけ一よをあおひく
を凡雅のんたもけあふりなるく

夕乃乃屋根ニクニ西他家ニク

知是亭

け里を家くくは須棧乃してなまあめて海着
乃く人ものしをりー色いふゆる秋旅のこよ
くをりて七夕の秋も結くんとおひくは
ゆるもえぬりとのん乃く内さくー

秋の川、棧ある侍よあわくも

素玩

し言不奮考をな乃二字と行して目よのつひ

六重ハ其の在姿かくの秋の世とも秋旅とも
重一ノ底乃空しりし時もおち一秋旅乃世
か秋とも底のんまくー秋と秋をどのつり
な姿も底一とん色一凡雅をりてと世
乃本情を物をの底狭も長短も家んり
志くふたしひお情まてさるる也

まを回りーはくを底乃涼り船

村あり鶴カウ乃巢立け出ある

あまはけ中と秋おひしりて鶴の巣立ま
秋く反の中ニよしりて村ありとて文字

とほらわさねを村のなほに月ひきてうらや
季のふたりの一もあつたははとほらわさね
林乃白のあつたははとほらわさね
あつたははとほらわさね

名録

休る陽や一斤の穂て山さくら 不奮
斐ゆの穂乃皆ちりや一帯箱
志の穂市上柳や凡乃尾長巻 十治
歌の家宵ひくら 一さくら麻
若屋の林乃おさよる 袖こそ外 如空

物清や夕目ののそく魚の歌
馬よせよ子たのねほる本袖わさ 山
いのくともいふてもいふね火燈が
短久まを夜も角あつたははとほらわさね
権乃花を血氣乃乃勇共心
新見歌はは穂て水の柳うら 和矣
月晴よ尾花よくら花あめ
畑のや藤さくら花乃及 知豆
山凡や木をそとつたははとほらわさね
市人か舞や乃名林よ山家け 一川

窓乃大もてうはくるゆは書と平
極人よきととて吸まる茶橋外 業信
とんぢうふうけて白鼻あく子たは
名月も揚るのつれや瓢箪 掃雀
さうくしとまふ前うける落葉も
井波

六月書

夏と極とと平やとて乃所也
立秋
一節乃系すわかれ 一と節の極

蕨人書

三日月乃定よとらへ行のむ

夕北書

銀屏外夜也七夕乃嫁入也

日し篇

け林外は砂とむう一信化よまきと種結りて
吾翁と相以顔をも志種ととる人なりし
とて此を年といとあくる風雅も種よとてあ
やうく一け地よ嵐まのおのこありてその時のつ
あうん水湯もあつたはう一と梅乃巻と

むし強翰う鶴魚乃膽もあ
 もる川乃執りやまらる世
 稲葉山形枯藤や種はく古里
 をぞひやロきる也

巻終

流化曰二日月の形容むし一よりさぬくならふ
 流よハ兼納ももえたりきもけお二日月を飛
 空をむよハ体あるより何らんうは約う日萩
 人考乃二日月を古今形形容た種をさのそ
 かりらようもあうて又ささる白乃流も

あうとととと人兼新謙といは徳乃牙と又之
 きりちとも兼廉納乃はゆを乃う種を移さるよ
 流りのゆよあハ兼造乃飛空といふは長七
 二日月や兼気いさあも流ぬ七
 是亦新流を世の人ハりハ真と種とやうてそ他
 よかり種て凡雅乃空を考ふハ
 亦曰武の其角う兼造ハこははの焦尾相考之上
 吟をさるよおほくも唐人乃廉言より世
 の人乃志さるまら白ハ十白の甲一二百よさるハ彼
 といふにんぬをさるよりあうてんは約日そのより

ありそ神よく志りぬ先妙令終の務伴候よ
 おりて後後義撰——中は終り彼う白と神
 てみ幸乃存の变化と云う次と其角り能港ハ
 はさぬへ——也ふりて終ハ晋子うとぬいをの
 ん乃作とこのゆとぬの生もあふ六百白の中二三
 白印と作子作とが子子とせれと世乃人も耳あ
 りてく晋子ハ能者なりとてくもさるる角文字
 乃いせと心ハ山花のまあとりてまとうひなり先
 終滅存とその能もましく長くてあるハ二作
 三作もおよりふきとてハ九重乃後ハ終りてお

終階子法をのり——きることくも人そりあ
 とあ——も晋子うの柔の身が終りる人ハ掌
 中乃とととるよもあ体あまううたてりせれ
 とそ終りて一寸乃流りのこりて子業のな
 らし固乃るん——おなり先妙曰階白ふある
 中れまのな終りてふをハ乃ちうとふはまて
 くとたくの氣愛と云うへ——と謙り極
 りて馬かこぬまはぬい——とてくも
 めてそ終りて先ハをのりん——のまをのり
 はくハ馬とりてこのよあさう——も作も

十ク十五ハ三へうくをよきまて天下の徳志
 とくをそりて馬きくは乃は巨子乃徳をた
 くらもそ徳ふをの徳うんたを所あれを
 こそ救はくは付あうん救うもたは体あや
 んかの言やうと衣原乃くを付くの愛化
 とたわしの家言を業し一函かくは徳と
 業とくうは徳徳ハきく愛化乃るのなり愛
 化とくをんハ徳徳乃新古よ見くはな
 西義集乃附方よ付正といふなり徳たれ
 是ハをたよき一あくわする付正を徳ハ兼

といふ一お名目なり一よけ何とたふ日乃
 追善の金

天神乃日と連ふ所のきよなり
 家々母もそのあつふお月
 是亦乃句を付正ともいふ一一在一具の氣
 妻を徳し志わくハねむよきなりなり

名録

言形下とかなや一妻乃言 浪化
 山畑や柿はりなり 業の古び
 乃所や付あまらと心板乃上



印のふやむらひくゝある大の御 林紅

秋ちりーのりもほまじむまき葉丸

ぬきいーのりもほまじむまき葉丸

涼ーまにまきおんこハかりそー 隆健

稲妻乃のぼりまきおんこハかりそー

林く巻や巻よ敷り原原よ骨 呂凡

子枝も動く小凡や巻乃の巻

抄地ひあともおんこハかりそー 先書

猶々まきおんこハかりそー 念くぬ

一村ひまきおんこハかりそー 更全

竹葉子松も動くや巻乃の巻

宵まき乃の巻もほまじむまき葉丸 荻人

まき乃の巻もほまじむまき葉丸

穂乃の巻もほまじむまき葉丸 胡仲

まき乃の巻もほまじむまき葉丸 夕兆



東西上

四十四卷

